

垂井町指定史跡

菩提山城遺跡

測量調査報告書



菁莪記念館

菩提山城遺跡

測量調査報告書

序

菩提山城は、石塁の全く見られない、中世末期に築城された山城の典型的な姿を今日に伝えています。その姿は、400年もの間、自然のベールに包まれていたので、お城の全容を知っている人は殆んどいませんでした。幸いなことに、ここ数年来、井上博史氏等の御尽力によって、調査の糸口を作っていただきました。町教育委員会では、文化遺産として、現在どのような姿で残っているかを測量を通して調査し、正確な山城の姿を把握することになりました。

測量調査は、地元・岩手の方々に測量調査委員会を結成していただいて、この事業を進めていただきました。春以来、委員の方々や測量技師の方々によって、菩提山城の測量と調査に当たっていただき、その御尽力に心からお礼申し上げます。また、測量調査のために、自由な立入りの便を図っていただいた土地所有者の方々に対しても深く謝意を表す次第であります。

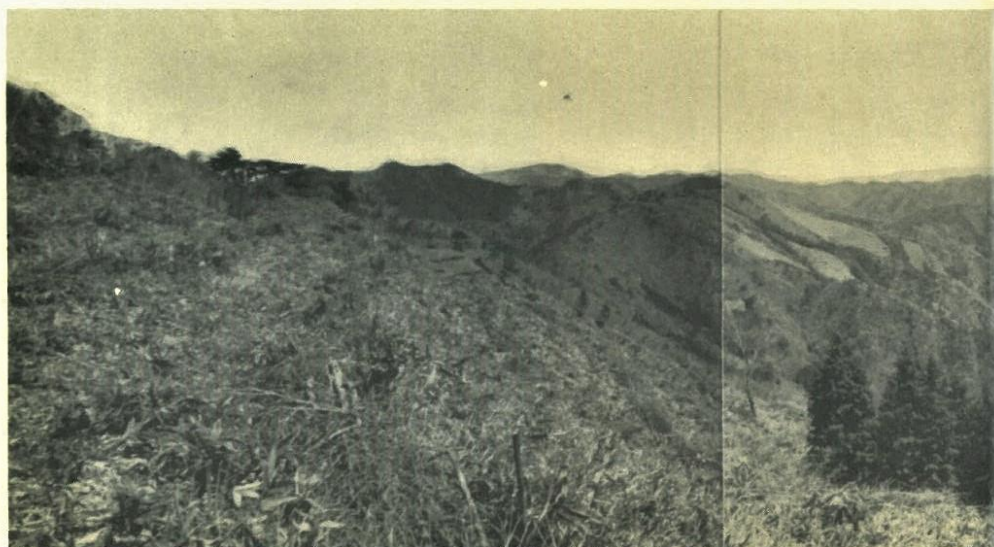
多くの人の力添えによってできあがりましたこの報告書が、郷土を知る上に役立ち、また、今後の山城の研究や城跡の探訪に御使用いただければ幸いです。

昭和55年12月25日

垂井町教育委員会

教育長 藤 墳 磯 吉

● 明神山から
菩提山城一
帯を望む。





● 菩提山城

菩提山城の測量調査を町教育委員から依頼され、岩手住民の手によって調査研究を進めてまいりました。起伏の激しい山城を測量いたしますと、私達が目で見たと違ふことに気付きました。また、今迄気にもとめなかったところが意味のある場所であつたりしました。平地と違って、測量に苦勞の多い調査でしたが、ついに山城の全容をほぼとらえることに成功しました。ここにその成果をとり纏め報告させていただきます。

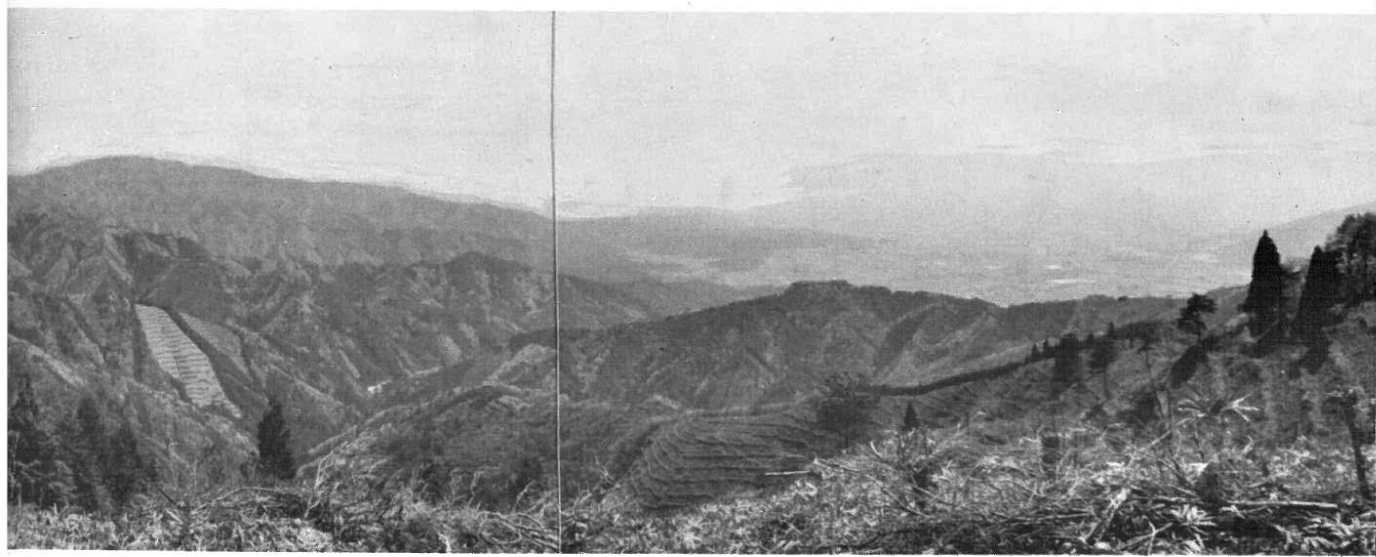
この機会に、菩提山城の雄大さを御認識いただきますと同時に、山城研究の一助になれば望外の喜びでございます。

なお、最後になりましたが、報告書をまとめていただいた小学校長並びにこの測量に際して、技術指導・協力を得た地元出身の技術関係者及び日東測量設計の皆様方に心から厚くお礼申し上げます。

昭和55年12月25日

菩提山城測量調査委員会

委員長 浅 野 元 脩



菩提山城

1. 所在地

岐阜県不破郡垂井町岩手 菩提山

四等三角点（標石012318）

標高 401.1 m

北緯 35° 23' 20.878"

東経 136° 29' 9.117"

菩提山は、岐阜県の西端に位置し、濃尾平野と近江盆地を分ける伊吹山地に属している。その主峰・伊吹山から東南に明神山（658.8m）があり、その尾根続きに菩提山がある。

菩提山北側の明神湖から東側にかけて岩手川が流れている。南側は、久保川が相川に合流している。つまり菩提山の、南西に伸びる尾根以外は、岩手川・久保川に囲まれた地形であり、山頂附近は傾斜が急でけわしく、登山のできる道は極めて限られている。

菩提山頂からは、東南に濃尾平野が眺望できて、眼下には国道21号線、東海道本線、新幹線が一望できる。

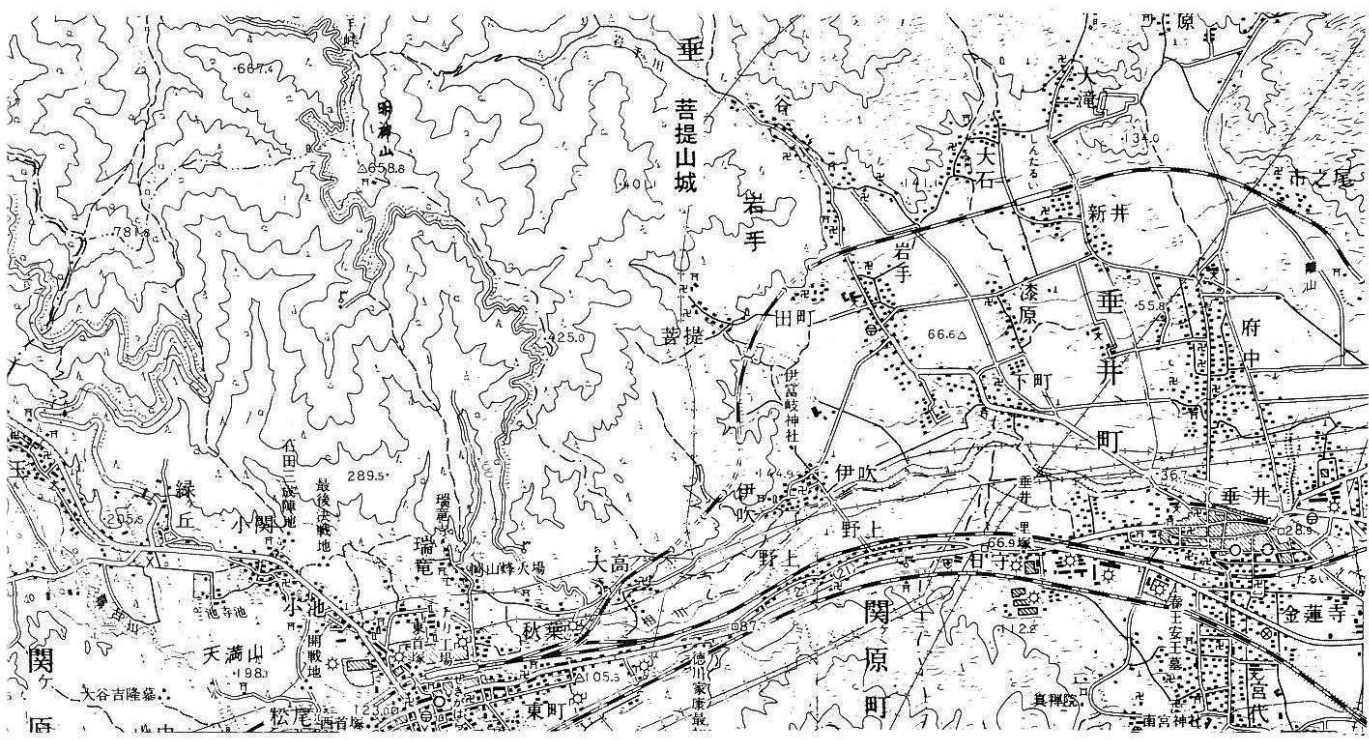
菩提山城は、この自然の地形を巧みに利用して構築した中世末期の典型的な山城である。

1:25,000地形図 国土地理院

伊吹山



新幹線



2. 菩提山城関係古文書の概要

天文13年8月9日、尾張に逃れていた土岐頼芸は美濃に侵入して、斉藤道三の稲葉山城を攻めた。そのときに、頼芸は、書状を岩手四郎（岩手弾正忠長誠という）に送って、菩提山城を守り、近江の浅井氏と六角氏に美濃へ侵入しないよう要請した。このときの文書が今に伝わる。

岩手氏 漆原に居館を構え、菩提山に砦を築いていたが、その構築の年代・規模は不明である。

岩手氏については、岩手の岩崎神社棟札によると、寛正2年（1461）6月28日源朝臣岩手又四郎長敏が岩崎神社造営の立柱を行い、文正元年（1466）11月19日に竣工した旨記されているのが最も古い記録である。

竹中遠江守重元 永禄元年、岩手氏を攻め滅し、福田・長松・四山一帯の地を領して6千貫の領主となり、翌年、菩提山に城を築いた。このことは、美濃明細記、竹中氏家譜等に記録が残されている。

竹中半兵衛重治 重元の子で、菩提山城を本拠とし、永禄7年2月6日、舎弟の久作、並びに家臣16名で稲葉山城を奪取した。この際、尾張の織田信長から稲葉山城の譲渡を乞われたが、あえて固辞し、主君・竜興を迎え入れて、自身は近江の浅井長政のもとに食客となった。

重治までは、館が岩手の西福村にあつて、山城には屋形が建てられていたという。

その子 **重門** は、重治の没後、菩提山城を下り、岩手に館を作り、附近に家中屋敷を配備した。このときから岩手川を外堀とする平城と城下町の形態に変わっていった。現存する櫓門と堀の一部が当時の陣屋跡を物語っている。

菩提山城関係 年表

西 暦	年 号	事 項
1543	天文13年	（鉄砲伝来）
1544	天文13年	土岐頼芸より岩手四郎へ「菩提山城之儀申出の処」の文書を出す。
1558	永禄元年	竹中重元は、岩手弾正を滅ぼす。
1559	永禄2年	菩提山に城を築く。不破河内守光治が菩提山城を襲い敗退。
1560	永禄3年	（樋狭間の戦） 重元病死する。 明泉寺を創建する。
1564	永禄7年	竹中重治、稲葉山城を奪う。
	永禄～ 天正	長松城・福田城（平城）を築く。
1575	天正3年	（長篠の戦）
1579	天正7年	竹中重治、三木城外・平山にて病死す。 竹中重門、菩提山城を下り、現在地に館を造り住う。
1600	慶長5年	（関ヶ原の戦） 竹中重門、東軍の先鋒をつとめ戦功をあげる。のちに、家康から米千石を賜わり、館の堀を完成する。

善提山之儀申出之處
 即時令二入城一之由注進候
 尤神妙候。江南北へ
 令二堅約一之条切々時宜
 彼方へ可二申談一候齊藤
 左近大夫かたへも堅申
 付候。要害之事無二油
 断一可二申付一候儀簡要候。
 猶稻葉右京亮可レ申候、
 恐々謹言
 八月九日 頼芸花押
 岩手四郎殿

・土岐頼芸書状 大垣市立図書館

(天文十三年)

善提山之儀申出之處

即時令二入城一之由注進候

尤神妙候。江南北へ

令二堅約一之条切々時宜

彼方へ可二申談一候齊藤

左近大夫かたへも堅申

付候。要害之事無二油

断一可二申付一候儀簡要候。

猶稻葉右京亮可レ申候、

恐々謹言

八月九日 頼芸花押

岩手四郎殿

〔美濃明細記〕竹中系

源重元 竹中遠江守 濃州池田郡

大御堂公郷邑也居之。永禄年中

岩手彈正居城ノ善提山ヲ攻取、

善提城居居。

〔竹中氏家譜〕

遠江守重元、性源、以二竹中一為

氏、美濃國不破郡岩手城主也。

永禄元^{戊午}卒^{兵攻}二同國岩手之城主

岩手彈正一戰敗。于^レ時重元歳六

十二。為二六千貫之主一、領二岩手

四山之外、福田、長松等一、同己未

歳築二城於同郷善提山一、

〔竹中家雜事記(写)〕

重元重治迄は岩手西福村に居住有

而、城には屋形斗有^レ之、騒動之

時城に取登防の心得にいたしたる

城也。

〔竹中氏家譜〕

永禄二年至^レ秋、不破河内守濃州

安八郡西之保城主五万石、進^レ兵

襲二善提城一接戰數回、殺二於河

内守旗頭椎野庄内 卒^レ夫之將掛

斐多門等、於^レ是敵兵失^レ利而引

退。又重元家士竹中善左衛門働在

レ之

〔同書に〕

正親町院御宇天正元癸酉年、於二

岩手一^生。嫁娶二加藤遠江守光泰

女一^生二於三男三女一。重治没後、

「重治死去の節七歳、幼名吉助と

云、秀吉公名付給ふ也一、亡父六

千貫之地^{信長ノ時代、為二五千貫}、善提之山城

を下り、岩手作^レ館住二居之一

3. 調査目的

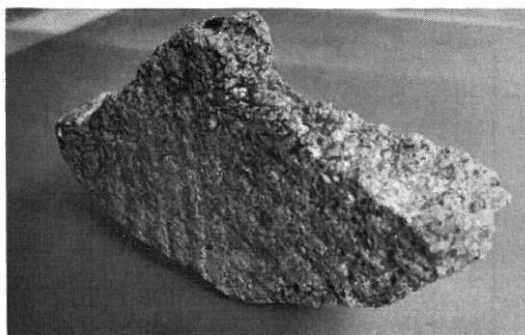
(1) 調査にいたる経過

昭和32年6月15日、菩提山城は、垂井町指定史跡となった。その当時は、山城の広さや構造は必ずしも明らかでなかった。

井上博史氏は、昭和50年前後から数年間かけて現地踏査を行い、山城全体の姿を浮き彫りにした。特に、調査中に山城跡から石臼片を発見し、昭和53年7月に、同志社大学三輪教授によって、山城当時の「曲谷臼」であることが確認された。

一方、岩手出身の不破幹雄氏によって、竹中半兵衛時代の家臣団の住居跡についての調査研究が進められ、山城をとりまく住居の位置が明らかになってきた。

地元の菁莪記念館では、山城と家臣団との関係について山道を踏査したところ、大手山道を



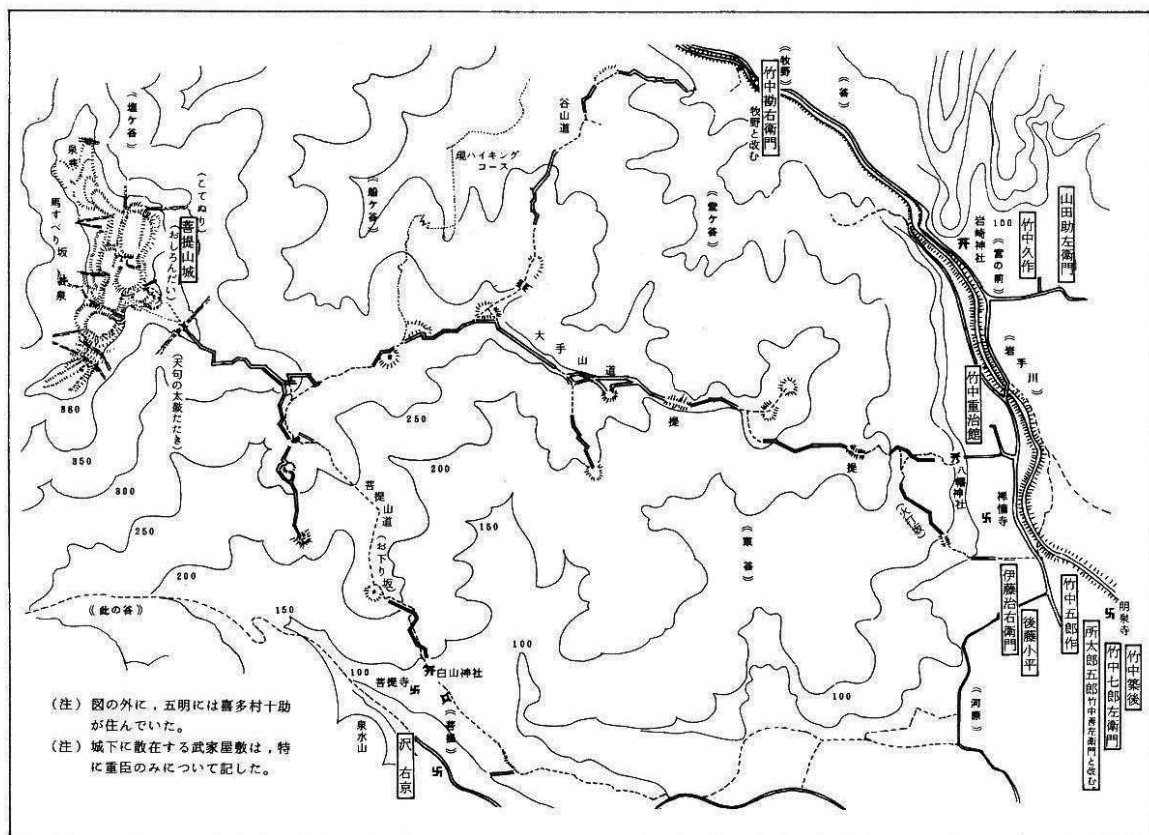
・菩提山城の曲谷臼片

始め、菩提からの山道、谷からの山道の3本が現存していることを確認した。

これらの関係をまとめると下図のとおりである。

(2) 調査の目的

山城全体が、大まかに把握できるようになった現段階において、山城跡の実測を行い、学術調査の基礎となるよう平面図を作成して、菩提山城をより明らかにすることを目的とする。



4. 菩提山城の実測とその考察

(1) 概要

当山城は、本曲輪・二の曲輪・三の曲輪、並びに台所曲輪が一組となって城の中枢部を構成し、その他に多数の小削平地を有し、2つの大堀切、7条の縦堀、および空濠とからなっている。塁はすべて土塁であり、石塁の見られないのが特徴である。

本曲輪は、標高403.28m、二の曲輪は標高401.1mの三角点がある。三の曲輪は、391.39m・出曲輪は391.06mとほぼ同じ高さである。下図のとおり、本曲輪から段下りの理想形をなしている。全長は、東西270m余り（出曲輪まで210m）であり、南北には、本曲輪から約220mと、広大な天峯を利用している。

その他に、大手山道と菩提の山道ぞいの山間

部には、各所に見張所跡と推定できる場所が散在し、東谷・菩提方面の監視が行き届くように配置されている。

菩提山は、平野部からの敵と明神山方面の尾根伝いからの敵を予想して築城し、堅固にしてしかも綿密に計算された巧妙さを現在の山城跡から伺い知ることができ、永禄初期からの優れた築城手法を見ることができる。

そこで当調査では、山城の縄張を、本曲輪・二の曲輪・三の曲輪・台所曲輪による中枢機能、三の曲輪・出曲輪等による防御機能、台所曲輪・西の曲輪（倉蔵）・水の手等による物資の補給機能、並びに・北の水の手方面の野営機能の四つに大別し、この四つの機能的な仮説を持って測量調査をした。

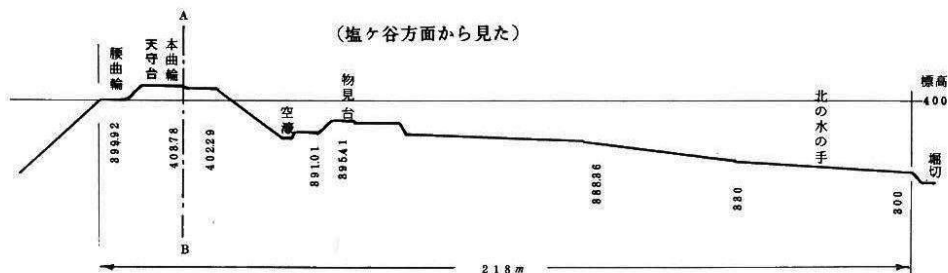
なお、城に関する名称は一般的な用語によって表示したが口伝のあるものは（ ）に表示した。

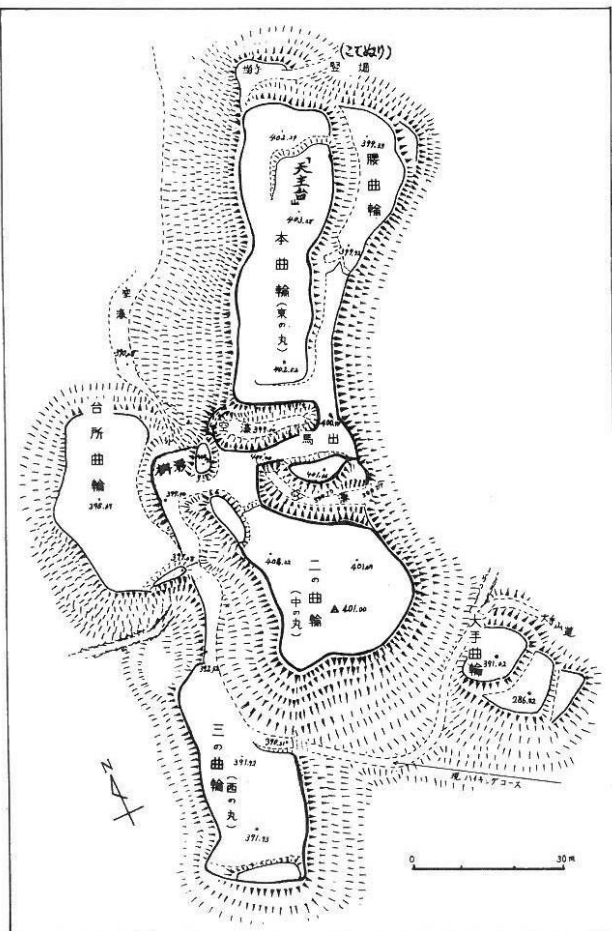
城台断面図

(大手山道方面から見た)



(塩ヶ谷方面から見た)





上段左・二の曲輪→
 右・堀切→
 下段左・台所曲輪入口→
 右・武者隠し→

② 中枢の曲輪

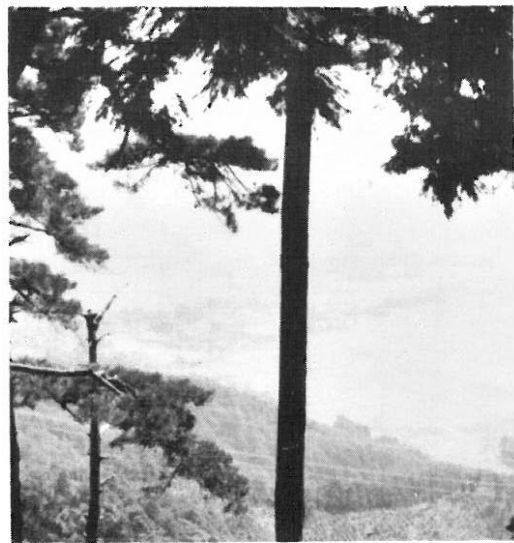
本曲輪（東の丸） 城の最東端に張り出し、最高所に当たる。南北に長方形をなし、面積は $825m^2$ 余りで、曲輪のうち最も広い。

本曲輪の中で最高所は、天主台の形態を残す。その東側一段下ったところに約 $225m^2$ の腰曲輪がある。

本曲輪の馬出（出入口）には、半円形に築いた土居があり、三日月堀が掘られている。また、本曲輪と空濠でへだてられている。

二の曲輪（中の丸） $800m^2$ 余りで極めて特異な形状をしており、西側に土塁を築いて虎口（出入口）とし、枳形が認められる。

三の曲輪（西の丸） $625m^2$ 余りで、二の曲輪との比高差は $10m$ あり、南側空濠添いに土塁が残っている。また、二の曲輪に通ずる通路は、台所曲輪の土塁でしゃ断できるので、三の曲輪には馬出的要素も伺われる。





(3) 防御の曲輪

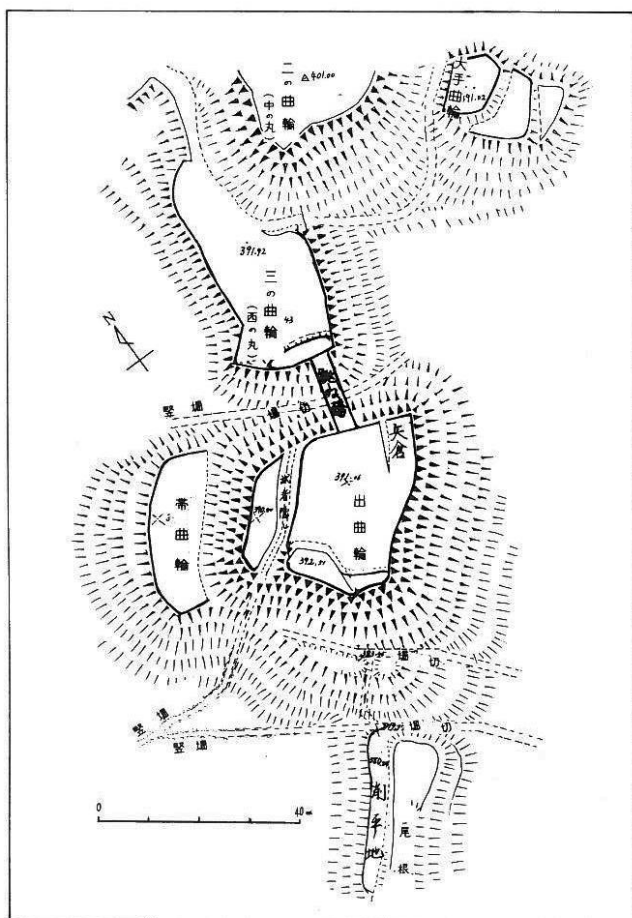
大手曲輪 二の曲輪の南に位置し、三段の削平地からなり約 $200m^2$ ある。大手山道方面の最前線である。大手山道が尾根の一本道であり、大手下の土橋で断できるので、比較的防ぎ易い地形にある。

出曲輪 三の曲輪と大堀切（上部 $16m$ 底部 $4m$ ）で隔てた曲輪で、 $900m^2$ の広さを持つ。跳ね橋で三の曲輪と接続していたと考えられ、武者隠しがあり、矢倉跡も認められる。西南の端に土塁を築き、西側に腰曲輪がある。

出曲輪の西南は、高さ $15m$ の急崖となり、二つの堀切によって尾根を切断している。

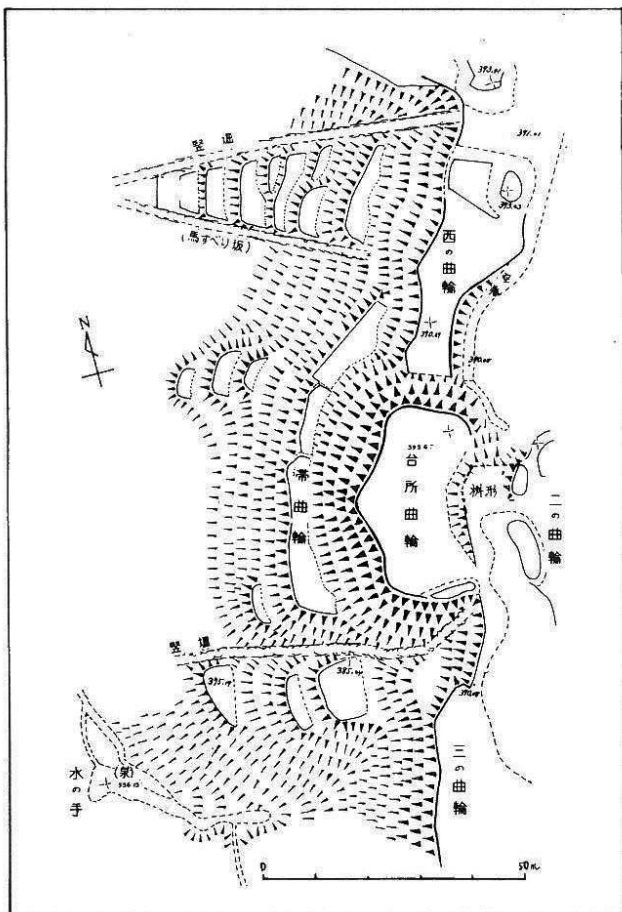
対岸の尾根には、尾根の一部を削平して幅 $3m$ 長さ $30m$ にわたって武者走りを作っている。

このように、尾根から出曲輪、そして三の曲輪へと、防御のための縄張が何段構えにも工夫されている。



↖ 上段・本曲輪

← 下段左・馬出、右・三の曲輪



(4) 補給の曲輪

台所曲輪 530㎡あり、中央に径15cm前後の石が散在している。曲輪の南端には土塁が築かれていて、二の曲輪へ通ずる通路に一部面している。台所曲輪の北側には、西の曲輪（倉蔵）があり、その西側斜面に物資集積場と推定される段々畑状の削平地がある。この削平地の一方は通称「馬すべり坂」、他方は竖堀となっていて、途中から1本になって頭連坊の谷に通じている。また、台所曲輪の8m下には、水の手と集積場を連絡する帯曲輪がある。更に台所曲輪と水の手の間にも幾つかの削平地が認められる。この水の手一帯には、昭和初期まで弓矢にできる竹が自生していたという。

このように幾つかの削平地が台所曲輪を取り囲むように構成されている状態から、台所曲輪は補給機能の中枢をなしていたと考えられる。



← 曲谷臼が出土した
台所曲輪

↙ 西の曲輪と空濠

↓ 水の手一帯



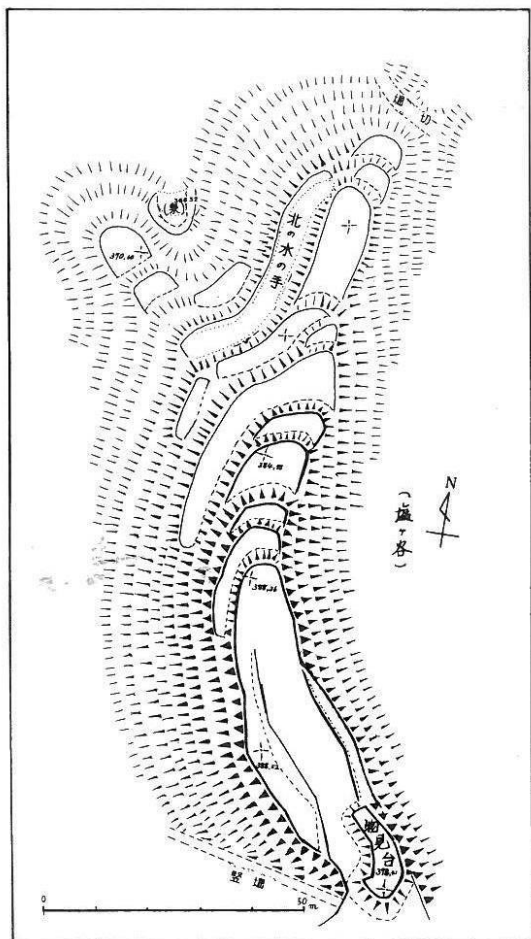


北の水の手一帯

⑤ 北の水の手一帯

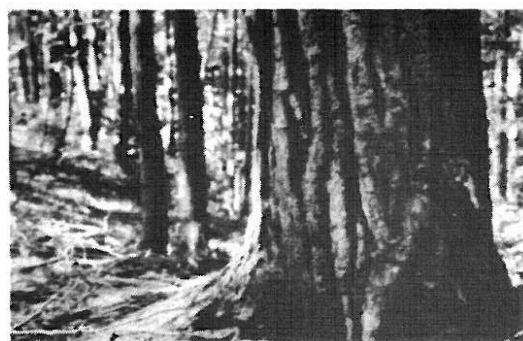
北の水の手一帯 自噴水の場所を底にした、すり鉢状の広場になっていて、最も安息感のたどよう静かな場所である。この附近は、北から南へと、幾つかの削平地が階段状になっている。削平地は、尾根伝いに南へしだいに狭まっていて、物見台と推定される丘で、西の曲輪と隔てられている。物見台附近の尾根は、犬走り・武者走り用に削平して、塩ヶ谷方面に対する備えをしている。これらの削平地は、北の尾根伝いの攻撃に対して、必ず上段で防戦できること。少人数になっても最後まで防戦できること等の防御に有利な機能を伺うことができる。

谷部落の守りは堅く、北からの攻撃を受けることは考えられないことから、北の水の手一帯は、堀切も貧弱であり、城として最も未完成なところである。したがって、野営は可能という意外、これを証明する機能的なデーターは見付からなかった。



北の水の手

水の手松(めたずり)



5. 考察のまとめ

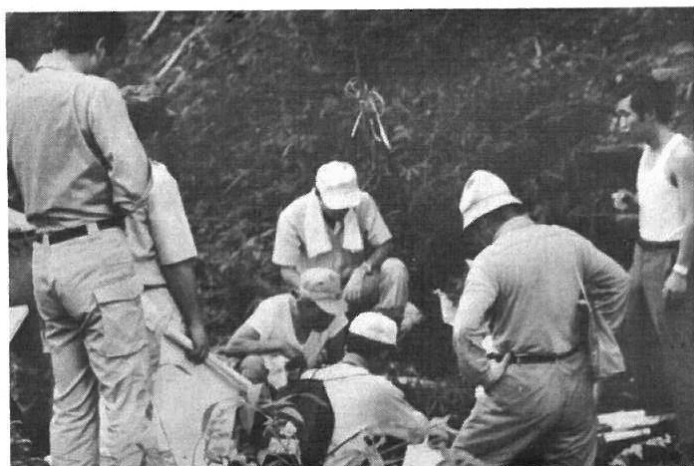
中世の山城は、本曲輪だけでも最後まで戦える施設・設備を持つことが必要であったが、当時の曲輪は必ずしも大きくないために、井戸や住居・収蔵施設が設けられる程度の簡単なものであった。

近世になって、平城に移るにつれて、本丸は城郭の中核としての機能が強化され、二の丸・三の丸・その他に多くの郭を持ち、それが本丸と一体的な構造になるよう拡大整備されてきた。

このように、山城から平城に移り変わる中で、菩提山城は、山城築城の末期に造られた城であるから、比較的規模も大きく、山城特有の空堀・堀切・豎堀・大手山道等の施設が見られるとともに、曲輪の組み立てが、中枢曲輪・防御の曲輪・補給の曲輪、それぞれの曲輪個有の機能を連結させて、城を一つの要塞とした組み立てが伺われる。

特に、400年の間、この城跡は自然の山そのまま利用されてきたので、その遺跡が改変されることが少なく、現在でも、当時の縄張を十分に知ることができるとともに、城郭をとりまく山道や番所等を巧みに設けていることも知ることができて、日本の築城史の中で山城の貴重な遺跡であると言える。

・大手山道



・測量調査

○測量調査期間

昭和55年4月より昭和55年11月まで

○測量調査委員

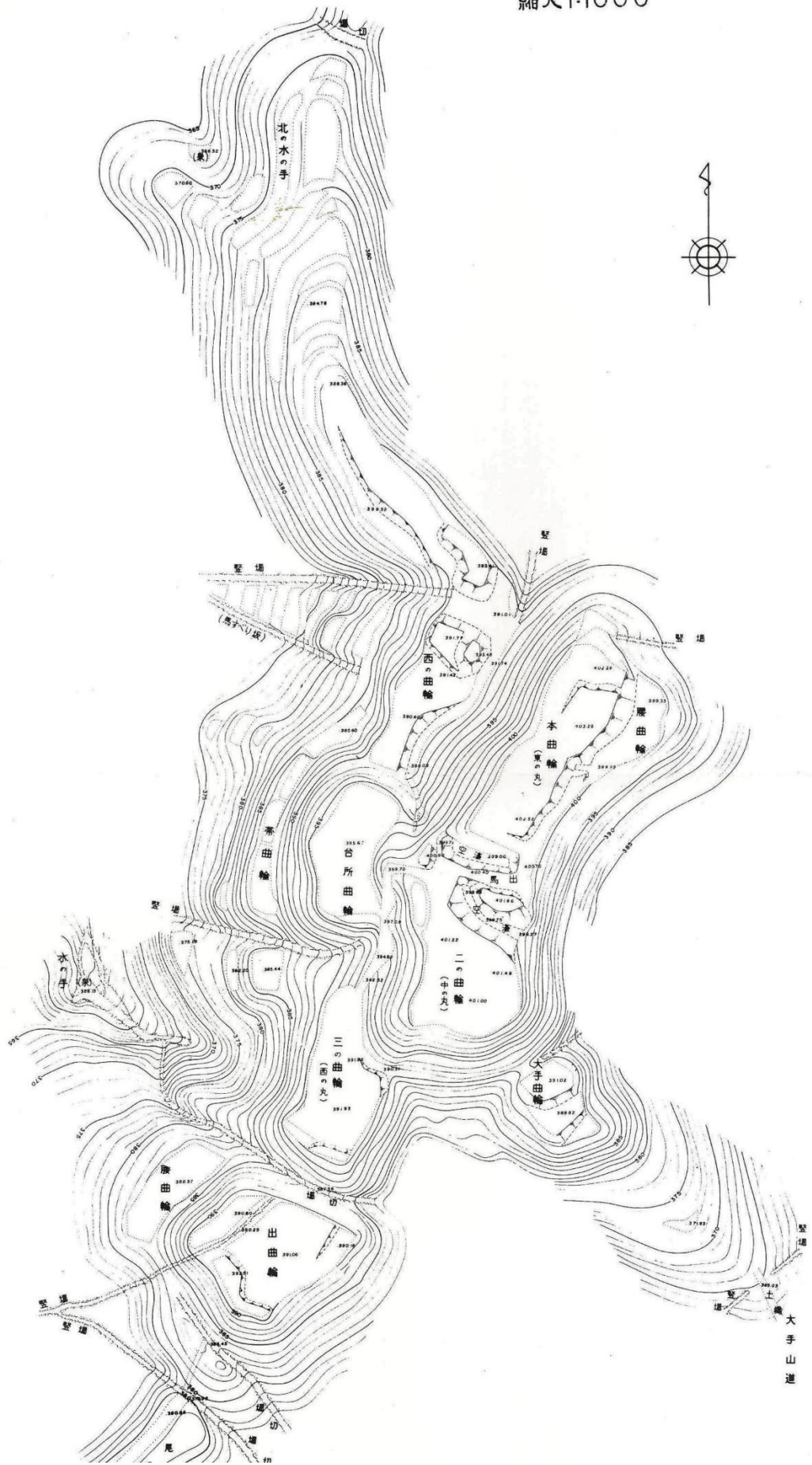
委員長	浅野 元脩
顧問	不破 幹雄 井上 博史
委員	栗田 茂 寺島 仙八
	山口義次郎 桐山 悟
	桐山 幸永 下林 亭一
	所 逸美 桜田 敬武
	川瀬 正己 児玉 政吾
主任調査員	柳瀬 司
測量主任	渡辺 昇三
測量指導	株式会社・日東測量設計

＜参考文献＞

竹中家雑事記(写)	藤井治左衛門
垂井町史	垂井町
不破郡史	不破郡教育会
城の日本史	内藤 昌著
日本城郭大系(9)	静岡・愛知・岐阜
一条谷朝倉氏遺跡	朝倉氏遺跡調査研究所
日本の城の基礎知識	井上宗和著
発掘調査の手びき	文化財保護委員会

菩提山城跡平面圖

縮尺 1:1000



菩提山
401.1 m



標石
012318



昭和55年12月
調査・編集 ・ 菩提山城測量調査委員会（菁莪記念館内）

寄 贈 株式会社・日東測量設計

